

2015年5月25日、楽天KOBスタジアム宮城。第62回春季東北地区高校野球宮城県大会第3代表決定戦。登米高(西塚久良校長、生徒396人)の歴史が動いた。

相手は地区予選の東部大会準決勝で敗れた宿敵石巻。試合前、千葉厚監督が静かなげきを飛ばす。

「集中しよう。リベンジして必ず東北大会に行こう」

序盤、2点のリードを許すも、ナインに焦りはない。前日、昨秋の明治神宮大会で優勝し、今春のセンバツにも出場した優勝候補筆頭の仙台育英を最後まで苦しめた自信が大きなアドバンテージとなって、イニングを重ねるたびにチームのムードは高まっていく。

2点を追う5回、打線が火を噴いた。1死から連続四死球と適時打で6点を挙げた登米は、その後も攻撃の手を緩めず15-4(7回コールド)で石巻を圧倒。ついに、春秋通じて初の東北切符を手にした。

6月4日から福島市の県営あづま球場で開かれた東北大会では、大舞台の緊張から実力を発揮できず、初戦で優勝した青森山田に1-9で敗れた。

「負けは想定内。格上の相手に打てる手は全て打った」と千葉監督。「あんなに緊張したのは、一年の夏以来。足が動かなくて、積極的なプレーができなかった」と高橋大喜主将。だが、最後まであきらめない「登米高野球」は貫いた。

課題は「戦術より基本」と千葉監督。「強いチームは、投げる、打つ、走るという基本がきちんとできている。青森山田から、当たり前前ことを当たり前前にこなすことの大切さを学んだ」と冷静だ。高橋主将は「走攻守全てにおいて個々のレベルが高く、チームのまとまりも素晴らしい。全てが勉強になった。この敗戦を教訓に同じ失敗はしない」と確固たる決意で前を見る。

敗れたからこそ見えるものがある。悔しいからこそ気付くことがある。

春は、東部、県、東北、全ての大会で1回ずつ負けた。「これは夏に向けて必要な負けだと思っている」と千葉監督。東部の敗戦からは、攻めるだけでなく我慢することを学んだ。育英と互角に渡りあえたのは「我慢できたから」だ。守り抜くこと、耐えることで流れを引き寄せる。「育英戦の我慢が、石巻戦のリベンジにつな



# 駆け上がれ、テツペンに 決勝の舞台で校歌を歌う

登米高野球部 千葉厚監督、清野俊亮部長、高橋大喜主将、部員 34人



強豪青森山田に敗れはしたものの、新たな歴史を記した「初得点」。そしてこの夏、新たな歴史に挑む

「監督就任時から「登米市から甲子園」を合言葉に野球と向き合ってきた千葉監督。昨夏、登米は優勝した利府に惜敗して16強。同じ登米市の佐沼が準優勝した。ここ数年、登米地域は加速的にレベルアップしている。「小・中学校の熱心な指導者が、いい選手を高校に送り出してくれる。地域の皆さんも出身校の垣根を越えて応援してくれる。チームにとって大きな支えです」と感謝の気持ちを忘れない。

駆け上がれ、テツペンに。夏(第97回全国高校野球選手権宮城大会)は第3シード。目標は、もちろん甲子園。合併10周年の節目に「育英に勝って校歌を歌う」。シード校同士の登米と育英が対戦するのは決勝の舞台だけ。監督、選手、マネージャー、そして地域が一つになって「登米市から初の甲子園」を目指す。